

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 飯泉 佑介

本論文は、G. W. F. ヘーゲルの主著の一つである『精神現象学』（1807年、以下『現象学』）を、「学」としての哲学の歴史的成立を正当化する試みとして解釈し、その哲学的射程を明らかにするものである。本邦における近年のヘーゲル研究は、これまで本格的に論じられてこなかった特定の側面に焦点を集めるものや、講義録等の比較的新しい資料に基づくものが多いが、本論文は近代哲学の総決算と言うことの出来る『現象学』に正面から取組み、その全体としての意義を思想形成史・方法論・理論構成論という三点から解明する。

第一部は、初期イエーナ時代に遡り、「学」の歴史的成立という構想の獲得に関する思想形成史的解明を行う。論理学から形而上学への移行を論じる「思弁的導入論」に意味を見出す有力な解釈を退け、意識を哲学の外部からその内部へと導く「主観的導入」論と世界精神の展開によって哲学の成立を説明する「哲学の歴史的成立」論の重要性を指摘する。

第二部・第三部は、『現象学』の理論的分析を通して、当初の構想の具体的な実現の模様を解明する。第二部は、「意識の経験」が内在的かつ必然的に生成するという方法論の意義を解明した上で、この方法論が『現象学』全体を貫くものであること、ついで、理性章までの前半部分が「意識の経験」の必然的かつ総体的な展開として、精神章以下の後半部が「意識の経験」を反省的に捉え返した「精神の運動」の多層的な展開として、それぞれ構成され、前者が「主観的導入」論、後者が「歴史的成立」論をそれぞれ継承するものであることを解明する。以上は、『現象学』の方法論と理論構成に関する透徹した理解を示すものである。

第三部は、『現象学』の方法論と理論構成論の意義を、自己意識章、宗教章、絶対知章の具体的な叙述の分析を通して検討する。論点は多岐に亘るが、事実的かつ没歴史的「現在」を、世界歴史によって媒介された歴史的「現在」として反省的に捉え返すことによって、超歴史的な「現在」へと止揚し正当化する点に絶対知章の役割を見て取る分析は、偶然性と必然性との狭間における過程として『現象学』の運動を解釈する本論文の立場をよく示している。

第四部は、「学」の歴史的正当化論としての『現象学』の帰結とその哲学的意義を解明する。「体系第一部」という位置づけを撤回し、成立した「学」の体系から正当化部門としての『精神現象学』を除外することになった理由というヘーゲル研究における古典的な問題への解答を、「学」の正当化が特定の歴史的現在に結びつかざるを得ないという点に求める。さらに、「学」の正当化という思考の運動を「観望する」「我々」の位置づけという方法論上の問題に関して、「我々」とは近代の公衆を意味し、『現象学』は公衆を自己否定的な教養形成・自己啓蒙へと促す企てに他ならない、という独自のテーゼを提出する。そして、最終章は、「学」の成立の歴史性の意義を改めて検討し、『現象学』に示されている歴史の捉え方の哲学的な意義を、フーコーを援用しながら、「現在」への「新しい問い」を先鋭化したものとして評価する。

このように、本論文は、「学」の歴史的正当化という問題意識から『現象学』を総体として読み抜き、その意義を解明した労作である。ヘーゲル研究の歴史的蓄積を十分に踏まえて、『現象学』を「学」以前/外部の歴史的事実に開かれた偶然性と必然性との狭間を歩む試みとして解明する本論文は、ヘーゲル研究に一石を投じるものとして高く評価することができる。他方、「思弁的導入」論の位置づけや方法論の要となる『現象学』緒論の読解等の主に解釈に関わる論点に関して検討の余地のある点、また、独自のテーゼが提出された「現在」を始めとする概念がやや哲学的な洗練に欠ける点、さらには、「学」の歴史的正当化という事柄自体に関する評価という大きな論点に関して哲学的な吟味がやや足りない点など、もの足りなさはある。とはいえ本論文は、ヘーゲルの『精神現象学』総体に対する透徹した理解とその今日的な意義を十分に示すものである。よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに値すると判断する。